

書 評

『地域研究調査法を学ぶ人のために』

佐藤 誠編 世界思想社 定価1950円 256頁

小関 隆志（一橋大学大学院博士課程）



本書は、若い研究者や学生が海外で地域調査研究を行うのに必要な方法を、14名の海外調査の経験者が自分の初期の経験談を交えながら平易な言葉で紹介したテキストである。

近年では人類学だけでなく、政治学や法学、経済学など様々な分野でも海外調査が普通に行われるようになってきたと言われており、それに伴って若い研究者や学生に対しての調査方法の教授が求められてきているのであろう。

本書は14名の著者がそれぞれ一章ずつ執筆し、それらが内容毎に「Ⅰ. 都市と農村を調べる」「Ⅱ. 民衆から学ぶ」「Ⅲ. フィールド・リサーチの方法」の3部に分類されている。そして末尾には「初めて調査に出る学生のために」という章が設けられ、事前の準備から海外現地での過ごし方、治安・保健衛生、調査終了後に至るまで、配慮の行き届いたアドバイスが書かれている。

14名の著者の専攻分野や調査対象はそれぞれ異なっている。例えば、シンガポール・マレーシアでの華人社会の意識形態の変容、独立直後のジンバブエ共和国の農村開発と協同組合運動、司法上の紛争に見る中国の法制度の問題、ブラジルの大都市の問題、タンザニアにおけるODA・農業開発プロジェクトの実態、中米グアテマラの社会運動、日本占領時代のインドネシアの農村の社会変容、などである。

著者たちの専攻分野や調査対象はこのように多様であり、調査手法の詳細も様々異なっているものの、各章を通読してみると、著者たちが自らの経験を通して読者に語りかけるメッセージはかなり共通していることが感じられる。そのメッセー

ジとは、おおむね次のようなことである。

まず、事前に可能な限り文献を集めて研究の状況を調べ、調査地域に関する情報を幅広く収集しておく。それをもとに自分なりのテーマを発見し、作業仮説を立てておく。生活面ではビザの取得や資金づくり、それから人脈づくり。現地で調査に協力してくれる人を多く知っていればいほど、調査は成功するという。

また、現地で利用すべき調査機関は調査対象によって、また調査目的に応じて選択する。調査方法でも質問表やインタビュー、参与観察などの方法を状況に応じて臨機応変に選択する。治安の悪いところでの身の安全、伝染病などの保健衛生にも注意する。帰国したら調査滞在中に世話になった人に礼状を出す、などである。さらに詳しい注意事項は各著者が当該国・地域に応じて指摘している。

海外での調査は独自の調査ノウハウを必要とし、大きな困難を伴うということが、文章の随所から伝わってくる。日常言語、生活習慣・文化・思想、治安・保健衛生など、日本国内では気づかないようなことが重大な問題として調査者の前に立ちはだかるためである。そのうえ、1回の調査で初期の目的を達成できるとは限らず、事情によって研究テーマを変更せざるを得ないことさえあるという。こうした様々な困難や危険を乗り越えて調査目的を達成し、調査結果を論文に結晶させるまでのプロセスには一言で言い表せない苦労があるようだ。

本書のテーマは海外調査の方法論であり、私は残念ながらまだ国内での調査経験しかないけれども、事前の文献サーベイや人脈づくりの必要性、被調査者への調査方法などの指摘は一般化すれば国内調査にも当てはまる部分があると思われ、本書から大いに刺激を受けた。